

平成二十八年年度 〔第一回 適性検査型・特別奨学生選抜入試〕

検査Ⅰ

時間 四十五分

受検上の注意

1. 解答用紙に、受検番号・氏名を記入してください。
2. 声を出して読むはいけません。
3. 解答は、解答用紙の所定のところに記入してください。方法を誤ると得点になりません。
4. 終了の合図とともに、解答用紙を提出してください。

郁文館中学校

以下の資料1・資料2を読み、あとの問いに答えなさい。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」があります。）

資料1

畑が足りない、お金が足りないという不満を抱えている農業者は少なくありません。栽培技術も然り。*1 就農してずいぶん経つ僕も、十分な技術が身についたとは思っていません。十五年経つても、一つ山を登ったと思うとまた次の山が見える、を繰り返しています。

ただ、この点についてはこんな風に割り切っています。そもそもお金も技術も十分、と思える日なんてこない、と。どこまで行っても自分より有利な条件に恵まれている人はたくさんいます。では、自分には勝算がないのでしょうか？ そんなことはありません。

東京ヤクルトスワローズの宮本慎也選手は、入団してまもなく野村克也監督から「二流の超一流になれ」と言われたそうです。自分は努力してもホームランを三十本打てる選手にはなれない。しかし、ずば抜けた素質や体格に恵まれた選手ではなくても、野球理論を極め、努力を積み重ねれば、チームに必要とされる選手になることができる。その言葉を聞いて、プロとしての生きる道が見えたと言います。

農業においても、最低限身につけるべき技術や揃えるべき設備さえクリアすれば、今持っている物、置かれている状況でできる事が必ずあります。全てが揃うまで待つ必要はないし、待つべきでもありません。就農を検討している人がよく「自分にはまだ農業を始めるだけの準備ができていない」と言います。僕が彼らに返す言葉は、「では準備万端だと思える日が死ぬまで来なかったらどうする？」です。持っていない物を数えていけばキリがありません。それよりも持っている物を数えて、それをどう使うかを考えた方が早いと思います。

*2 久松農園では美味しい野菜をつくっているとします。しかし、同じ事に取り組んでいる農家はたくさんいますし、多くの農業者は技術も労働力も資金力も僕たちより上です。その中で「僕たちにしかない本当の強みは何か？」を考えれば、発信力とネットワーク力です。農産物を出荷するだけでなく、僕たちが熱くなっていること、面白いことを伝えることに力を入れています。「不完全だけど、これが今のベストなんだ！」というありのままを晒せるのが僕らの強みです。僕は子供の頃から「口から先に生まれた」と*4 揶揄されて来ましたが、結局、今でもそこに頼って仕事をしています。弱みも強みに変えられるのです。日本一甘いトマトをつくる農家や日本一収量の高い農家にはなれませんが、日本一しゃべれ

る農家にはなれるかもしれませんが。手持ちの武器がそれしかないので、開き直ってそれを使っているのです。

久松達央『キレイゴトぬきの農業論』（新潮新書）

〔注〕

- ※1 就農：職業として農業を始めること。
- ※2 久松農園：筆者が経営している農園。
- ※3 晒す：だれにでも見えるようにする。
- ※4 揶揄：からかうこと。

※1 エコストーブはもともと、一九八〇年代にアメリカで発明され、「ロケットストーブ」と呼ばれていた。和田さんがその存在を知ったのはほんの数年前のことだ。震災直前の二〇一〇年の正月、庄原市内で開かれたロケットストーブを紹介する会に参加した。目から鱗が落ちた。

「これは面白いぞ。これを使うと山の木もたくさん使って山がきれいになる。『里山を食い物にすることができるといい』と思いました。おいしいご飯が炊けるといのは、里山暮らしを豊かにするのにすごくいい。そして、里山の人だけでなく、みんなが欲しがるといアイテムなのではないかと直感しました」

しかしロケットストーブは、子どもの背丈ほどもある大きなドラム缶をベースに、レンガを使って作られるため重く、とても持ち運ぶことはできない。そこで、仲間の一人が、ひとまわり以上小型のペール缶で同じ構造のものができないかと改良を加え、今の形ができあがった。

武器を手にした和田さんは、里山暮らしの良さをアピールする活動を加速させていった。合い言葉は「里山を食い物にしよう」。わざと「食い物にする」という言葉を使うのが和田さんのセンスだ。過疎化で人が去り、荒れ放題となった里山。忘れられ、放置されてきた資源に再び光を当て、めいっばい使ってやろうという決意が込められている。それはライフスタイルを戦前に戻したり、電気のある便利な暮らしを否定したりということでは決してない。そうしたのも当然使いながら、いかに財布を使わずに楽しい暮らしをするか身の回りを見直していく。するとアイデアが次々と浮かんでくる。こうして「原価ゼロ円」の暮らしを追求していくのだ。

和田さんは、朝一番には近くの小川に向かう。川にはえるクレソンをつむためだ。お好み焼きに使ったり、スープを作ったり。野草は野菜の原点である。自宅の畑で作る野菜も、農薬は使わず、刈り取った草を肥料にする。ここでも、ほとんどお金はかからない。

畑には、エコストーブと並ぶ秘密兵器がある。それは、カボチャ。カボチャは皮の表面に傷をつけておくと、一週間ほどで傷をつけた部分が浮かび上がる。それを利用してメッセージを書く。「ありがとう」とか「長生きしてね」とか。世界にひとつしかないメッセージつきのカボチャは、どんな高級品より喜ばれる贈り物となる。和田さんはこれを、色んなものをもらったお返しに贈る。「交歓具」と呼んでいる。

「自分で作りたいぶりがっこ（燻製したたくあん）とか、ちくわとかチーズなんかに入れて、いろんなプレゼントをしてくださった方々に返し

ています。物々交換ぶつぶつこうかんの武器です。金では計れない喜びがあるんじゃないかと思っています」

お金がないから物々交換をするのではない。楽しいからするのだ。

考えてみれば、田舎暮いなからしはお金をかけるより豊かなこと満載まんぞくだ。サラダにする野菜は、直前まで裏うらの掛水かけみずに浸ひめておく。ひんやり冷たい湧わき水は、冷蔵庫よりお金がかからず、しかも豊かだ。和田さんは、それをこんな風に解説する。

「例えば五月頃ごろには、うるさくて寝ねられないカエルの大合唱とか、ウグイスのつがいつがいが五、六組もいるような谷とか、※₂桃源郷とうげんきょうはこういうところかなと思います。しかし、これまでは、こういう田舎が犠牲ぎせいになってきた。それは、いくら稼かせいでいるかという**金銭**的な尺度しやくどだけで物事が計られてきたからではないでしょうか。そんな田舎の犠牲の上に、都会の繁栄はんえいがもたらされている一方的な構図のままでは、日本は長続きしないのではないか。いつか、底が抜けてしまうのではないかと思います」

藻谷浩介『里山資本主義―日本経済は「安心の原理」で動く』（角川ONEテーマ21）

※1 エコストーブ：二〇リットル缶にL字型のえんとつをつけただけの、自作できる簡単な構造のストーブ。料理にも使え、灯油や石油、電気を使わない。

※2 桃源郷：理想郷。

〔問題1〕

資料1に「では、自分には勝算がないのでしょうか？」とありますが、この問いに対して、資料1の筆者はどのような答えをだしていますか。一〇〇字以内でわかりやすくまとめなさい。

〔問題2〕

資料2に「『交歓具』と呼んでいる」とありますが、「交歓具」とは、本来「交換具」と書くべき熟語と考えられます。その「換（かえる、とりかえる、の意味）」の漢字を

「歓（よろこぶ、たのしむ、の意味）」と書きかえたのはなぜでしょうか。

文中の**決意****金銭**という語を必ず使い、一〇〇字以内でわかりやすく答えなさい。

〔問題3〕

あなたは、これから先の人生（中学、高校、または大人になってから）、何をしていきたいですか。考えて四〇〇字以上五〇〇字以内で書きなさい。なお、以下の指示を必ず守ること。

- ・自分の「弱み」について必ず書き、それをどのように「強み」に変えていくのか、考えて書きなさい。
- ・自分の体験、経験について具体的に書きなさい。
- ・答えは、各段落の最初を一字下げるなど、原稿用紙を使うときのきまりに従い、一行目から書き始めなさい。書き出しや改行など空らん、記号（、や。や「」など）も字数に数えなさい。